

平成22年 5 月 20 日現在

研究種目： 基盤研究（B）  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号： 19320022  
 研究課題名（和文）「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究  
 —日本中世の文学・絵巻から—  
 研究課題名（英文）“Studies on the Transmission of Culture communicated by ‘Things’  
 and Images: Focusing on Japanese medieval literature and handscrolls.”  
 研究代表者  
 池田 忍（IKEDA SHINOBU）  
 千葉大学・文学部・教授  
 研究者番号： 90272286

**研究成果の概要（和文）**：本研究は、日本の中世の物語絵画、とりわけ多様な知識や情報を共有し伝達する媒体であった絵巻の描写を手がかりに、身分と階層を跨る絵巻制作者と享受者の重層的な世界観を明らかにしようとするものである。本研究では、中世の人々の日常生活、労働、信仰、行事、儀礼、合戦の他、異国や異域、神仏化現の舞台となる「場」（型）を抽出・収集し、そこに描かれた建築や環境、多様な「もの」に、身分差や階層差、ジェンダーの差異がどのように描き分けられ、関連付けられているかを具体的に検証し、物語絵画、とりわけ絵巻という媒体の歴史的特性を明らかにした。

**研究成果の概要（英文）**：These studies consider medieval picture scrolls, in particular painted scrolls, as media that transmit information and knowledge. The objective of these studies is to examine the worldview of the producers and consumers of these scrolls, whose class backgrounds and social status is reflected in the multiple strata that compose the worldview presented in the works. Previous research on medieval hand scrolls has created stylistic and iconological genealogies of individual works and genres, as they attempted to make clear the context in which these works were produced. We pay attention to the ways in which social status and gender differences are portrayed and put in relation with each other in the picture scroll's depictions of architecture, environments and “things.” These studies analyze this material from a concrete and plural standpoint, in order to further the research of individual works and explore the historical characteristics of picture scrolls and medieval hand scrolls more generally.

**交付決定額**

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史、文学一般、日本史、絵巻、ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、メンバーが別個に参加したふたつの共同研究を背景に発足した。

そのひとつは千葉大学大学院人文社会科学研究所におけるプロジェクト研究「中世仏教文化の形成と受容の諸相 ―「絵画」の問題を中心として」(千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第134集、2007年)で、同一組織に所属する中世文学と美術の研究者(柴佳世乃、久保勇、池田忍、土屋貴裕)の四名による共同研究であった。各々が当時の関心に沿って絵画や文学、あるいは記録を分析対象とし、その描写や記述の中に「視覚的なイメージ」が生成、集積、伝播、変容する様相を捉えようと試みた。ここでいう「視覚的なイメージ」とは絵画(美術)のみを指すわけではない。人の眼差しによって切り取られた現実世界の一部、人の手が加わって生まれた景観、建築や庭、一定の「もの」を配して整えられた場や空間、それらの場における人の営みを含む。絵画、そして文学・記録などの文字テキスト、すなわち表象の諸領域は、相互関係を保ちながら現実世界に生成する「視覚的なイメージ」を具体的に文字で記述、あるいは造形によって提示している。プロジェクト研究を進める過程でそのことがはっきりと浮かび上がってきた。本共同研究の端緒はそこにある。

もうひとつの背景として、和文の物語や日記、説話などの中に残された造形に関するさまざまな情報を抜き出して集成する『平安時代文学美術語彙集成(本文編・索引編)』(笠間書院、2005年)の刊行に至るまで続いた、文学と美術の研究者による共同研究(伊東祐子、成原有貴、池田忍が参加)があった。ここでは絵画遺品の少ない平安時代の文学の中に残された、貴族階級の人々が価値を認めた様々な「もの」、意味を付与された「場」(空間)、あるいは人の姿、振る舞いなどについての情報収集をおこなった。その作業を終えた時に芽生えたのは、絵巻制作の場が拡大する中世において、上記のような情報がどのように具体的に絵の中に表現されているのか、その行方を追ってみたいと考えた。

さらに本研究は、近年の日本美術、文学研究の動向に示唆を得ている。ことに美術と文学、異なるメディアが交渉する絵巻という媒体は、制作と享受の場を拡大し、中世日本の世俗社会と宗教界の重層的な関係を支えたことが、さまざまに指摘されている。絵巻に限らず掛幅縁起絵研究の分野でも調査研究が進み、物語絵画の実態、その意味や機能に関する考察は、目下深化の過程にある。また、

日本中世の絵巻物全体を素材として、描かれた事物や行為を取り出し、それに語彙を与えて示す試みとして夙に知られる『絵巻物による日本常民生活絵引』(渋沢敬三編、『日本絵巻物全集』附録(旧版、角川書店)1964~1968年、平凡社(新版)、1984年)以下継続する「絵引」編纂の視点と方法からも学んだ。ただし「絵引」が、個々の絵巻の文脈や「物語」から「絵」を引き離し分節化して集積、索引により相互の比較を可能にし、連関を浮かび上がらせる点に特徴があるのに対し、本研究は画中の事物や行為に十分な注意を払う点で「絵引」を継承しつつも、描かれるひとままとりの「場」に注目し、要素としての建築や環境、「もの」の選択・構成の論理を考究したいと考えた。それには、詞書の詳細な検討が不可欠であることはいままでのない。文学研究者との協働によって「もの」に関する情報、従来の詞書を同時代の史資料、文学テキストに照らしておこなった注釈的成果を生かすべくつとめた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の中世の物語絵画、とりわけ多様な知識や情報を共有し伝達する媒体であった絵巻の描写を手がかりに、身分と階層を跨る絵巻制作者と享受者の重層的な世界観を明らかにすることである。従来の絵巻研究では、主として作品やジャンル毎に図像と表現の系譜学的探究が試みられ、制作環境の解明が目指されてきた。しかし多くの絵巻には、主題に沿った「詞」が語り出すプロット(あらすじ)を越え、共通して複数の「場」が設定されている。またそれらの「場」は、一定の要素(「もの」)によって構成される「型」を共有している。本研究では、中世の人々の日常生活、労働、信仰、行事、儀礼、合戦の他、異国や異域、神仏化現の舞台となる「場」(型)を抽出・収集し、そこに描かれた建築や環境、多様な「もの」に、身分差や階層差、ジェンダーの差異がどのように描き分けられ、関連付けられているか、その具体的な検証を目指した。

## 3. 研究の方法

研究を進めるに際して採用した方法は、大きく分けると以下の二つである。

第一に、参加者の関心に沿って多くの絵巻作品を検討し、そこに描かれた「もの」とひとままとりの「場」を抽出し、データの蓄積を図ること。第二に、作品の表現を熟視し、細かな細部に込められた制作者や注文主の関心を探るための作品調査である。美術史研

究において不可欠な作品の熟覧に際しては、所蔵者、所蔵機関の理解と支援をいただいた。

#### 4. 研究成果

本科学研究費助成による各自の成果とは別に、報告書『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究—日本中世の文学・絵巻から』を編んだ。その内容は論文四編、加えて「絵巻を読む—場の型、もの、人物の描写を手がかりに一」として十編の論考、および連動する「絵巻画面分析表」を掲載した。

「絵巻画面分析表」の作成は、本研究独自の取り組みの成果である。その意図は、すでに述べたように、絵巻作品の中に「詞」が語り出すプロット（あらすじ）を越えて設定される「場」に着目し、またそれらの「場」を構成する一定の要素（「もの」）を含む「型」を抽出して、データベース（エクセルファイル）を作成することにあつた。一般に絵巻の画面は、同一の時間と空間を表現する「景」によって構成されると考えられている。これに対し、提示した「絵巻画面分析表」の特徴は、Dの項目として立てた〈場の型〉を基準として、絵巻画面を分節する点にある。〈場の型〉とは、人の行為によって立ち上がるイメージの型を指している。たとえば、「隠棲歌会 影向 絵解き 往生 往来 下命 化粧 課役 合戦 管弦演奏 鑑賞 奇瑞 祈願 祈禱 見物 公卿僉議 工房 行軍 婚礼 参詣 参籠 産養 示現 写経 手仕事 酒宴 受戒 蹴鞠 出家 出産 昇天 説法 造仏 待機 対話 託宣 探索 伝奏 土木建築 読経 覗き見 憑依 病氣 武芸 法会 訪問 面会 門前 流鏑馬 遊戯 礼拝 霊夢」などの言葉で「型」を捉えようと試みた。それは各論考において具体的に指摘されるように、必ずしもひとつの場がひとつの型に対応するのではなく、画中の出来事は画中人物の視点に応じて、もしくは物語の語り手や鑑賞者の立場から見て複数の型に対応する場合がある。描かれた「もの」と「場」の関係を、この「型」という視点を導入して探究した。これによって、中世絵巻に描かれた多様な「場」を「型」として捉え、共時・通時的な関係性を浮かび上がらせることができた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ①柴佳世乃・戸波智子、慶政と園城寺—慶政『三井寺興乗院等事』『大師御作霊像日記』を読む—、千葉大学『人文研究』、査読有、39、2010、69-104頁  
<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg10/Jinbun39-04.pdf>

②土屋貴裕、鉄心斎文庫蔵「伊勢物語画帖」について、美術研究、査読有、399、2010、359-394頁

③江戸黄檗研究会（水野僚子共著）、江戸黄檗禅刹記（五）翻刻と解題、黄檗文華、査読有、128、2009、163-182頁

④池田忍、鎌倉時代「白描絵入源氏物語冊子」の歴史的位置をめぐって、国文学 解釈と教材の研究、査読無、53-1、2008、40-51頁

⑤柴佳世乃、南溪蔵所蔵『仁王経文点』解題と翻刻ならびに影印、千葉大学『人文研究』、査読有、37、2008、81-98頁、

<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg10/Jinbun37-03.pdf>

〔学会発表〕（計3件）

①中村ひの、遊行上人縁起絵における祖師と二祖の造形、美術史学会 第62回全国大会、2009年5月22日、京都大学

②伊東祐子、藤原俊成と紫式部歌をめぐる試論—『千載集』入集の紫式部歌を手がかりに一、中古文学会 平成19年度秋季大会、2007年10月7日、山形大学

③土屋貴裕、Buddhist Picture Scrolls of the Kamakura and Nanbokucho Periods and Historical Consciousness: Viewed through the “Tengu zoshi” and “Shakkyo sanjurokkasen-e”, The Ninth International Workshop on Japanese Art History for Graduate Students: Opposition and Fusion in Visual Art, 2007年12月2日, Seattle Art Museum

〔図書〕（計12件）

①池田忍編著、「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究—日本中世の文学・絵巻から—（共著）、千葉大学文学部、2010、203頁

②池田忍・小林緑編著、視覚表象と音楽 ジェンダー史叢書第4巻（共著）、明石書店、2010、332頁（亀井若菜論文名「不浄観から読み解く「掃墨物語絵巻」—中世絵巻が見せるフェミニン・エンディング—」142-162頁、水野僚子論文名「土蜘蛛草紙」に描かれた女性の身体—図像と解釈言説の再生産をめぐって」182-203頁）

③高山利弘・久保勇・原田敦史編、校訂延慶本平家物語（11）（共著）、汲古書院、2009、146頁

④栃木孝惟・松尾葦江編、延慶本平家物語の世界（共著）、汲古書院、2009、270頁（久保勇論文名「延慶本平家物語の異体字・当て字について」169-173頁）

⑤浅井和春監修、稲本万里子・池上英洋編著、イメージとパトロン 美術史を学ぶための23章（共著）、ブリュッケ、2009、396頁（土屋貴裕論文名「久保惣記念美術館蔵「伊勢物語絵巻」と伏見院周辺」85-102頁）

⑥倉田実・久保田孝夫編、王朝文学と交通（平

安文学と隣接諸学7) (共著), 竹林舎, 2009, 632 頁 (土屋貴裕論文「絵巻に描かれた旅—鎌倉・南北朝期における祖師・高僧伝絵の制作をめぐる—」310-336 頁)

⑦今関敏子編, 涙の文化学 (共著), 青簡舎, 2009, 362 頁 (亀井若菜論文名「絵巻に見る『涙』の表象—『泣く姿』が構築する力関係」137-166 頁)

⑧池田忍他編著, 講座源氏物語研究第 10 巻 源氏物語と美術の世界 (共著), おうふう, 2008, 271 頁 (池田忍論文名「源氏絵としての神護寺「山水屏風」—宇治十帖物語の舞台となる住居のイメージをめぐる—」96-148 頁、伊東祐子論文名「平安時代の物語と絵の交渉について—徳川・五島本『源氏物語絵巻』東屋 (一) の図様と詞書をめぐって—」9-41 頁)

⑨松岡心平編, 看聞日記と中世文化 (共著), 森話社, 2009, 376 頁 (柴佳世乃論文名「伏見宮と法華経談義—心空・鎮増との関わりに及んで—」153-177 頁)

⑩辛島正雄・妹尾好信編, 中世王朝物語の新研究 — 物語の変容を考える (共著), 新典社, 2007, 440 頁 (伊東祐子論文名「『藤の衣物語』の引用をめぐる—引歌と行基菩薩からみえる時代背景—」136-167 頁)

⑪藤本勝義編, 王朝文学と仏教・神道・陰陽道 (平安文学と隣接諸学2) (共著), 竹林舎 2007, 550 頁 (亀井若菜論文名「『信貴山縁起絵巻』の尼公の表象—女人往生のイメージ」290-317 頁)

⑫倉田実編, 王朝文学と建築・庭園 (平安文学と隣接諸学1) (共著), 竹林舎, 2007, 582 頁 (水野僚子論文名「絵巻物にみる寝殿造—貴族の住空間をめぐる景観の意味と機能」342-373 頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

池田 忍 (IKEDA SHINOBU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号： 9 0 2 7 2 2 8 6

### (2) 研究分担者

柴 佳世乃 (SHIBA KAYONO)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号： 9 0 3 4 3 0 8 7

久保 勇 (KUBO ISAMU)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・助教

研究者番号： 1 0 3 2 3 4 3 7

伊東 祐子 (ITO YUKO)

都留文科大学・文学部・非常勤講師

研究者番号： 7 0 4 4 8 6 9 5

(H19→H20：連携研究者)

亀井 若菜 (KAMEI WAKANA)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号： 3 0 2 7 6 0 5 0

(H19→H20：連携研究者)

### (3) 連携研究者

水野 僚子 (MIZUNO RYOKO)

大分県立芸術文化短期大学・国際文化学科・専任講師

研究者番号： 3 0 4 6 9 2 0 9

(H19：研究協力者→H20)

土屋 貴裕 (TSUCHIYA TAKAHIRO)

東京文化財研究所・企画情報部・研究員

研究者番号：

(H19：研究協力者→H20)

### (4) 研究協力者

成原 有貴 (NARIHARA YUKI)

学習院大学・文学部・非常勤講師

メラニー トレーデ (MELANIE TREDE)

ハイデルベルグ大学・美術史学部・教授

須賀 隆章 (SUGA TAKAAKI)

千葉大学大学院人文社会科学研究科博士

課程3年・日本学術振興会特別研究員DC

1

中村 ひの (NAKAMURA HINO)

千葉大学人文社会科学研究科博士課程3

年